

『幽蘭堂年譜』と『升堂門生録』の関係

西巻 明彦

北里大学東洋医学総合研究所医史学研究部／日本歯科大学医の博物館

『升堂門生録』は、池田瑞仙の塾への入門帖では『重校痘科弁要』の後半に掲載されており、天明8年から文化11年までの門人の出身地と氏名が合計234名、三都40か国にのぼり、6葉に記述されている。天明8年から入門順に記され、最後は文化11年の入門者と考えられ、瑞仙は寛政10年に江戸医学館痘科教授へ招聘されたため、前半は京での入門者、後半は江戸の入門者と思われる。入門帖の前半は西国出身者が多く、後半は東国からの入門者が多くなっていく傾向がみられる。全国別の入門者をみると、播州57名、甲州27名、摂州13名、奥州12名が上位を占め、そのうち播州が全体の24.5%を占めている。竹下喜久男氏は「播州は遊学が盛んにみられる」と述べているが、池田塾への入門者も同様の傾向がみられる。播州は江戸時代、姫路藩、龍野藩などの大名領、幕府直轄領、大坂城代領が複雑にからみあっていたものの『正保郷帖』には55万4600石に対し、『天保郷帖』では65万1500石に増え、それに加えて龍野の醤油など地域の特産品も増え、経済的基盤が確立していた。さらに京・大坂へと近いという地理的要因も遊学熱を増大させた一因と考えられる。

『幽蘭堂年譜』は龍野藩儒である股野玉川(1730～1806)による日記で、延享3年から文化3年6月29日まで記されている(龍野市立図書館蔵)。この中で、宝暦10年10月から文化3年6月までが『播州龍野藩儒家日記<幽蘭堂年譜>』として公刊されている。『幽蘭堂年譜』の寛政5年9月25日の条に「昨朝和田謙堂・同純造同道出立、姫路表用事立寄候由、今朝松尾玄長・深津善紹・円尾玄東・関昌庵など出立、京都遊学之由也、就中痘瘡家専門池田瑞泉と申医人甚名家二而同人へ入門之由也。」と記されている。和田謙堂は、『重訂痘科弁要』巻六に、佐井文庵、加藤養本とともに校訂を担当していることから、池田瑞仙の高弟であり、今回の入門に対し同道したと推測され、龍野藩の医師達の入門に大きな役割を果たしたと考えられる。また『升堂門生録』2葉目の松尾玄長らの入門時は、寛政5年頃との記述と推定される。ただし、深津善紹の名は記されていない。また『幽蘭堂年譜』の寛政5年9月19日の条に、「今夕松尾玄長・和田純造・小西純達・深津善紹・相招餞送、但玄長・純造・善招は廿四・五日出立京都遊学四五カ月も在積、礼治・純達ハ大阪へ罷越し一所二出立二付相招ク。」とある。これらのことから、遊学者の人々は股野玉川の幽蘭堂出身者と考えられ、当時の人的ネットワークの実態が見られる。『升堂門生録』には陰山礼治の名も認められることから、大坂から京へ上り、池田塾へ入門したと思われる。

南木左重は龍野藩医であるが、同じ藩医の円尾玄東の紹介により寛政6年8月18日36歳で皆川淇園に入門しているが、ほぼこの時期に『升堂門生録』に左重の名が認められる。左重が『幽蘭堂年譜』に玉川の寛政6年6月に高山彦九郎一周忌に内輪で出席しており、玉川とのつながりが強いと想像される。

龍野藩の蘭学事情は『幽蘭堂年譜』で和田謙堂が天明2年6月に長崎へ出立、関昌庵は享和元年3月に長崎遊学から帰着した条項が見られ、左重は『載書』に寛政11年11月に大槻玄沢の芝蘭堂に入門している。『幽蘭堂年譜』には、左重は寛政11年12月に龍野に帰着しているが、この3名は池田塾へも入塾している。一般に池田瑞仙は蘭学を排撃したと言われているが、瑞仙自身和蘭外科の出身であり、高弟の佐井文庵、和田謙堂とも蘭学に好意的であることから、演者は蘭学に対し一定の理解があると考えている。むしろ池田学派も蘭学も当時最新の医学で、遊学生にその方向性を教育した玉川の幽蘭堂教育は注目に値すると考える。